



はやね はやおき 朝ごはん テレビを止めて外遊び

# きずな

～きらきら ににこいきいき～

平成28年度  
別海町立上西春別小学校  
学校だより No.7  
平成28年9月30日  
発行責任者  
校長 横澤 英三

## チーム道下（みちした）

この夏を賑わした、リオデジャネイロ・オリンピック、パラリンピックが閉幕しました。そのパラリンピックの最終日に、うれしい知らせが入ってきました。それは、視覚障害者女子マラソンで、道下美里さんが銀メダルに輝いたというものでした。

道下美里さんは、13歳の時に角膜の病気で、右目の視力を失いました。「だけど、私には左目がある」。このことが美里さんの希望でした。短大卒業後、道下さんはレストラン経営を夢見て、調理師免許を取得します。ところが、25歳の時、左目の視力もほとんど失ってしまいました。目が見えないため、運動不足になり、太り始めた美里さんは、26歳の時、ダイエット目的に走り始めます。最初は200mがやっとだったとのこと。しかし、練習するほど走れるようになり、中距離走で次々と日本記録を更新。さらには、31歳の時、フルマラソンに挑戦。6年後には、当時の世界最高記録の2時間59分21秒で走りました。

そんな道下さんには、自身の「生きる力となった3つの言葉」があります。

### 【神様は乗り越えられる人しか試練を与えない】

13歳の時、右目の角膜の手術のため入院していた病院で、たまたま出会ったおじさんから言われた言葉です。そのおじさんは、居酒屋を営んでいましたが、交通事故に遭い、一生車いすでの生活を余儀なくされました。しかし、誰を恨むわけでもなく、それが運命だと語っていたそうです。「おじいちゃんのように誰も恨まず、強く生きられたらいいな。私も将来、そんな風に考えられるようになったらいいな」と考えさせられた言葉でした。

### 【全然、大変と思ったことはないけどね】

25歳の時、母親が母親の友人と話しているとき、偶然聞こえた言葉です。母親の友人が「娘さん、目が不自由で大変なことも多いでしょう」という問いかけに対する返事だったそうです。左目も見えにくくなったため、できることがどんどん無くなり、日々に喜びを見いだせなくなり、家族や社会のお荷物なんじゃないかなと思っていた頃だったので、母親の強がりかもしれないけれど、「何か一つでもいい、母のために、母が喜んでくれることをしたい」と考えさせられた言葉でした。

### 【それで離れていくならそれまでの人】

結婚直前に、親友と行った京都旅行中に、親友から言われた言葉です。目がこんなにも見えないということ、親友に知られなくなかった美里さんは、白杖をつかずに歩きました。ところが、親友に手を引いてもらわなければ、観光などできなかった美里さんは「ごめん、私とおってもつまらんやろ」と親友に言っていました。親友は怒って、「美里は何で素直に言ってくれんの？甘えるところはちゃんと甘えんと。いっつも美里は1人で無理してる。それじゃ人を拒絶してるのと同じじゃん。美里が甘えて何かをしたって、それで私は離れていかんし、離れていく人がおればそこまでの人。でも美里の周りにはそんなことで離れていくような人はおらんし。美里が杖持って歩いていようと関係ない。やけえ甘えてよ。杖ないと大変やったら使えばいいやん」と言いました。「無理して大丈夫なふりしなくてもいいんだ。ありのままの自然な私でもいいんだ」と思った言葉でした。

視覚障害者のマラソンには、欠くことのできないものがあります。それは伴走者です。その伴走者を含め、数多くの人々が、「ありのままの自然」な道下さんの周りに集まり、「チーム道下」を結成し、今回のリオ・パラリンピックでも美里さんをサポートした結果が、銀メダルにつながりました。

「今の私があるのは、けっして私1人の力ではありません。1人では目のことをずっと引きずっていたかもしれませんが、言うまでもなく、私が自分に降りかかった現実を受け入れられるようになったのは、多くの人の助けがあったからです。どんな困難でも周りの人と一緒なら乗り越えていける」と美里さんは語っています。

銀メダル本当におめでとございました。

校長 横澤 英三

